

回族の宣教活動に参加する

奈良 雅史
民博 超域フィールド科学研究部



イスラームを宣教してみました
ムスリムの前でイスラームについて語る筆者
(撮影：マー・ヤーディ、2010年)

中国の少数民族・回族とイスラームを調査していた筆者が、現地で思いがけずイスラームを「宣教」することになった。自身はムスリムでないため困惑しながらも、地元の人びとを前に語り始める。そんな貴重な経験から見てきたものとは。

イスラームを「宣教」する

もう二〇年ほど前になるが、わたしはイスラームを「宣教」したことがある。ただし、わたしは目下のところムスリムではない。わたしは中国西南部・雲南省でイスラーム系少数民族・回族たちが漢族を中心とする非ムスリムと隣り合いながら、いかにイスラームを実践してきたのかを調査してきた。中国では約二〇〇〇万人の回族が全国に分散して各地でモスクを中心としたコミュニティを形成して暮らしてきた。彼らのあいだでは、改革・開放政策以降、イスラーム復興が急速に進展し、宗教活動が活発化した。そのひとつに宣教活動がある。この活動はアラビア語でダアワ（イスラームへの呼びかけ）とよばれるもので、非ムスリムへの宣教だけではなく、ムスリム同士で信仰心を高め合うことも含まれる。わたしが参加したのは後者の活動だ。



中国の伝統的なモスク (2010年)

二〇一〇年一月、わたしは回族たちによる宣教活動に同行させてもらった。その際、活動参加者の回族たちから活動先のモスクで、そこに集まった三〇名ほどの地元の回族たちを前にイスラームについて話すよう求められた。しかし、ムスリムでもないわたしが宣教の場でムスリムたちに何を話せるというのか。そう彼らに率直に伝えたが、「いいからいいから、みんな喜ぶから何でも良いから話してくれ」と譲らない。仕方なくしどろもどろになりながら日本におけるイスラームの現状を紹介し、中国国外での回族に関する研究の高まりについて話した。ムス

リムではないわたしが宣教活動においてムスリムを前にイスラームについて語る。これは一見するととても奇妙な状況だ。

回族を取り巻く状況の変化

一九八〇年代以降のイスラーム復興にともない、信仰に目覚めてより一層敬虔になる回族があらわれるようになった。彼らはイスラームについて自ら学び、意識的にイスラームを実践することを重んじる。例えば、礼拝のとき、コーランを唱えなくてはならないが、彼らはただ漫然と唱えるだけではなく、そのコーランの一節一節が何を意味するのかを理解しようとする。

一方で、特に都市部では改革・開放以降の再開発にともない、回族はモスクの周辺に集住することができなくなり、彼らの日常生活においてモスクが疎遠なものとなっていった。その結果、回族のあいだでイスラームが重視されなくなる傾向が見られるようになった。わたしの友人は、「親が（学校での）勉強の妨げになると言ってモスクに行かせてくれなかった」と語った。回族

中国 雲南省

宗教的権威の在処

回族は中東や中央アジア出身の外來ムスリムを出自にもつ人びとだとされるが、現在はそのほとんどが中国語を母語としており、アラビア語を話すことができる者は稀だ。そのため、彼らは中国語訳の文献を通じてイスラームを学ぶ。それにはそれなりの中国語の読解能力が求められる。こうした中国語の読解能力は学校教育を通じて培われる。よって、高学歴者はより深くイスラームを理解できる。現地の回族のあいだではこのように考えられる傾向にある。つまり、世俗的な学校教育での学歴の高い者が宗教的権威をも発揮しうる状況にあるのだ。実際、調査地での宣教活動のおもな担い手は回族の大学生たちであった。そして、わたしは当時、博士課程の大学院生であった。こうして冒頭の事態に至るわけである。



ラマダーン期間中の日没後の食事 (2009年)

のあいだで宗教教育よりも学校教育を通じて立身出世を果たすことが望まれるようになってきたため。これらの現象は回族社会においてイスラーム復興と世俗化が同時に進展し、二極化してきたことを示しているように見える。しかし、必ずしもそうではなく、これらは密接に結びついている。以下で述べるように、

現在、わたしはときどきシンポジウムなどにおいて中国語で研究発表をする。これも不安になる。そんなとき、何の準備もなく拙い中国語でムスリムの前でイスラームについて話さなくてはならなかったことを思い出す。そして、「あのときに比べたら大丈夫」と自分に言い聞かせている。



ラマダーン明けの祭りでの礼拝 (2008年)